

## 献呈の辞

本論文集は、名古屋大学大学院法学研究科および法学部において、二一年間の長きにわたり西洋政治史講座を担当され、教鞭をとり続けてこられた北住炯一先生のご退職を記念して編まれたものです。北住先生は、京都大学法学部を卒業後、名古屋大学大学院法学研究科に進学され、そこでフランス革命研究の泰斗である中木康夫教授に師事されました。しかし、研究者の道を歩むことを決意された北住先生はフランスではなく、ドイツ政治史を自らの研究領域として選択されました。周知のごとく、ドイツ史は社会科学においてもっとも伝統的な研究領域の一つであり、それだけに大海を一人行くがごとき厳しい研究生活をすごされたことと思われれます。しかしながら、北住先生は誠実に研究者、教育者としての務めを果たし続けられ、いささかの揺らぎもなく今日に至っておられます。

僭越ながら、先生の日常のお姿を拝見しておりますと、名古屋大学におけるドイツ政治史研究者として、先生は「一所懸命」を貫かれてこられたように思われます。「一所懸命」とは、「一生懸命」に転じて使われている言葉ですが、本来は、貴族の下僕にすぎなかつた武士たちが、幕府を開いた鎌倉の將軍家によつて領地を与えられたことにより、御恩奉公を誓う一方で、一族郎党の生活を支えるその所領を懸命に守つたことに由来しています。

北住先生は、誠実な学究の徒であることで知られている方ではありますが、他方で、名古屋大学が發展していくために、いくつもの重職をあえて引き受けてこられました。その間、研究の中断を余儀なくされたようですが、大学人として、また法学研究科の一員として、厭われることなく責務を果たしてこられました。今日では、それこそ命懸けの職務となりつつある法学研究科長、高等研究院長等を歴任されてこられました。義務を逃れるという発想を

まったくもたない先生は、研究外においても「一所懸命」であつたわけです。先生の「一所懸命」からは、現在の大学と研究者が適応しようとする懸命になつてゐる適者生存の競争社会とは、異質の、人間としての生き方があるのではないか、といった感慨がわいてまいります。

また、義務といつても先生の場合は、おそらく困難にひるまず、誠実に自分の置かれてゐる状況に立ち向かう、懸命に努力し続ける、ということと同義であつたと思われまゝ。その点で、研究教育に従事する先生の姿勢と同じであり、名誉や評価を受けることへの欲求とはむしろ無縁であつたと思われまゝ。先生が名古屋大学において二年間の「一所懸命」を貫かれたからこそ、先生の生き方に研究者、さらには人間としての生き方を学ばせていただいている、そういった感慨を後輩に与えられてゐるのだと思われまゝ。

さて、本論文集はそうした北住先生に対し、十一名の研究者たちが日頃暖めてきた着想にもとづき執筆した研究論文を献呈するものであります。北住先生は、ドイツ政治史研究を十九世紀から二十一世紀の今日に至る長い射程でとらえる歴史家であらうとされています。そこで、本論文集は、第一部を近代の歴史実証研究による「近代世界の展開—ヨーロッパと東アジア」と題し、第二部は政治学の理論的関心と分析とを用いた、「現代世界の展望」とする、二部構成をとることといたしました。十一人の執筆者はそれぞれの人生において、先生と共に名古屋大学で過ごし、また多くの薫陶を受けた者であります。ささやかではありますが本論文集をもって、先生に心からの感謝を捧げるものであります。

二〇〇七年三月九日

編集代表 増田知子